

実践と理論の間で

讓原晶子

これまで西洋藝術舞踊の理論的研究を行ってきた。主な研究領域は、①実践観察を基盤にした研究、②文献を基盤にした研究、の二つである。

舞踊の研究は、踊る立場であれ、鑑賞する立場であれ、舞踊に触れた経験から始まるのがほとんどではないかと思う。私の場合も、バレエの現場で抱いた様々な疑問から研究を始めていた。舞踊家 Anne Woolliams (1928-1999, Kurt Jooss, John Cranko のバレエ・ミストレス)の下に弟子入りしたことが、本格的な舞踊研究の始まりになった。彼女のもとで 2 年間参与観察を行い、没後には遺稿整理の依頼を受け、*Anne Woolliams: method of classical ballet* (Kieser Verlag, 2006) にこれをまとめた。20 世紀を生きぬいた彼女の「舞踊観」を表現したい、チケッティやワガノワとは一線を画する「20 世紀のバレエ理論」としてまとめたい、という強い思いとともに、この著作に着手した。また「なぜ彼女のもとから多くの振付家が輩出されたのか」についても考察したいと思った。思索の末、ウィリアムスのクラスで実際にやられたアンシェヌマン五百余りを分析、体系化して、提示することにした。彼女の思考法を表現するにはこれがベストであり、またこれを最も必要としている人たちに伝えるのにも、これがベストの方法だと思ったからである。こうして、「論ずる」のではなく、アンシェヌマンの体系化を通して(もちろん解説もつけたが)彼女の思考法を表現する著書が完成した。舞踊研究が実践と結びつく限り、こういう研究の表現法もあってよいと考えている。

この研究を基盤に別の「論ずる」研究も多数派生した。「クペからみたバレエ史」、「バレエにおける temps の概念」、「『踊る身体のディスクール』」、「Historical and contemporary Schrifftanz: Rudolf Laban and postmodern choreography」などである。バレエ用語の解釈を重視する理論家ウィリアムスの影響を受け、フイエの時代からコンテンポラリー時代までのバレエ史を、バレエ用語を基軸に見渡し考えることができたからである。一般に研究では、自ら発見した新しい考えを、論理的、実証的に提示する必要があるが、これらの研究ではアイデアの淵源はウィリアムスのクラスすなわち実践現場にあり、そこで得た発想(すでに掴んでいる「答え」)を実証するために、文献を徹底的に漁るという方法をとったことになる。

ここ 10 年は、②の文献研究に移行している。①の研究では、西洋藝術舞踊史を舞踊の動きそのものに注目することで眺めてきたのに対して、現在は、作品、他藝術分野との関連、時代思潮との関連という視点から、これを見直している。それは、大きな文脈のなかでの舞踊藝術の立ち位置をより明確にしたい、という動機によるものである。西洋藝術のなかでも、舞踊は美術などに比べると、まだまだ手のつけられていない領域が多いと実感することのごろである。今後若い研究者が大いに活躍できる領野が開

けていると確信するとともに、その基盤となる知識を後進へ伝達するその仕方に、一層の工夫が要されると感じている。

譲原晶子（ゆずりはら あきこ）

千葉商科大学政策情報学部教授。著書に *Anne Woolliams: method of classical ballet* (Kieser Verlag, 2006), 『踊る身体のディスクール』(春秋社, 2007年)、訳書にアンジェリカ・グデン著『演劇・絵画・弁論術』筑波出版会、2017年、主要論文に、4月「クペ」からみたバレエ史、『美学』217, 2004年；バレエにおける temps の概念、『美学』222, 2005年、メネストリエのバレエ理論からみたノヴェール: 『舞踊とバレエについての手紙』(1760)における借用を巡って、『美学』244, 2014年；バレエにおけるアラベスクとグロテスク, 『美学』252, 2018年；‘Kylián’s space composition and his narrative abstract ballet’, *Theatre Research International*, Vol. 38, No. 3, 2013, ‘The construction of classical dance vocabulary in the light of the principle of variation: a comparison with compositional techniques of contemporary dance’, *Comparative Theatre Review*, Vol. 12, No. 1, 2013, ‘Historical and contemporary Schrifftanz: Rudolf Laban and postmodern choreography’, *Dance Chronicle*, Vol. 37, No. 3, 2014 などがある。